

シャドーの仕方、園・学校との連携の取り方

2012/04/15 東京定例会

藤坂龍司

1. シャドーの意義

<シャドーとは>

「シャドー」(スクールシャドー)とは、園や学校で発達障害を持つ子どものそばに付き、子どもを援助する役割の人。日本で言う付添い、介助員。

ロバース博士は、子どもを家庭で集中的に療育した後、健常児の集団の中に子どもを入れるにあたって、セラピストの一人をシャドーとして付けた。シャドーはピアトレーニングと並んで、集団への適応を促進するための重要な鍵だと思われる。

<なぜシャドーが必要か>

自閉症児はある環境で学んだことを、そのままでは他の環境に応用することが難しい。つまり家庭でできるようになったことでも、園や学校で発揮できないことが多い。そこで家庭で学んだことを園や学校で応用することを促し、援助する人間が必要となる。これがシャドーである。

<シャドーの適格性>

シャドーによる援助の効果を上げようと思ったら、シャドーは誰でもいい、というわけにはいかない。

まずシャドーはABAの知識と支援技法を身につけていなければならない。しかも担当する子どもが家庭で何を学んでいるかをよく知っていなければ的確な支援はできない。したがって家庭でその子どものセラピーを担当している親かセラピストがシャドーになる必要がある。

<親がシャドーに付くこと>

米国ではたいていセラピストがシャドーとして付くようだ。しかし日本ではABAセラピストの数が少ないせいもあって、親がシャドーに付くケースが多い。

日本では外部のセラピストが園や学校に入ることに對して、園・学校の警戒心、抵抗感が強い。その点、親ならまだしも受け入れられやすい。それもわが国で親がシャドーとなるケースが多い原因の一つである。

<シャドーのメリット>

親やセラピストがシャドーに付くことには次のようなメリットがある。

- ・子どもが何ができて何ができないか、今何が課題なのかを熟知しているので、必要な時に過不足のない援助ができる(逆に通常の介助員は過剰援助や援助不足が多い)。
- ・園や学校で課題を見つけて、それを家庭に持ち帰って練習することができる。

<親がシャドーとなることのデメリット>

逆に親がシャドーに付くデメリットとしては、次のようなものがある。

- ・家庭療育、家事、育児の負担に加えてシャドーの負担が加わるので、身体的な負担が大きい。
- ・周りの子どもたちとわが子とのギャップの大きさを目の当たりにして落ち込んでしまう、
- ・子どもが親に甘え、あるいは逆に親がいることに反発して、援助がうまくいかない。

以上のメリット、デメリットを比較して、親がシャドーに付くかを決めてほしい。

<シャドーが必要な子ども、撤退時期>

元々は家庭療育でかなり改善し、高機能かそれに近くなった子どもを、健常児の集団の中に入れ、最終的にはそこで一人でやっていけるようにすることがシャドーの目的である。その場合は、シャドーそのものが徐々にフェードアウトしていかなければならない。

しかしもう少し重いお子さんだとシャドーをつける意味がないか、と言えば、そうではない。たとえ知的にキャッチアップすることが無理だとわかっている、健常の子どもたちの中で過ごし、そこで得られるものを吸収することには大きな意味がある。付き添いがなければ普通学級で過ごすことが無理な子どもでも、シャドーが適切な援助をすれば可能になることがある。その場合は、シャドーは必ずしもフェードアウトが必要とは限らない。卒業までシャドーを継続することもありうる。

2. シャドー受け入れの交渉

シャドーを希望するときは入園・入学の前の年の春か夏に園・学校に相談に行く。予め電話で用件を言って、園長・校長に面会を求めよう。できるだけ両親がそろっていくこと（パパは背広で）。

教育委員会や市議員に働きかけるのもよいが、その場合でもまずは園長・校長に先に相談をして、彼らに断った上で上部に働きかけを行なうこと。この順序を飛ばすとこじれることがある。

幼稚園の段階からシャドーをしていると、「すでに実績がある」ということで小学校でも認められやすい。ただ私立幼稚園の場合、園長や理事長の考えがすべてなので、受け入れを拒否されたら終わりである。無駄なあがきはせず、別のところを当たろう。公立の方がまだしも交渉の余地がある。

面会のときはシャドーの意義、希望する理由を真摯にお話する。A4版1～2枚の紙にあらかじめ趣旨を書いておいて、お渡ししてから話しをするとよい。その際、園・学校で見たことは決して他言しない旨の約束を入れておく。学校が一番気にするのはそこだから。

親がシャドーに付くというと、「子離れしてないだけ」と思われがちなので、面接では自分が子どもを客観的に見ている、ということを示さなければならない。

あと公立学校は前例がないことはやりたがらないので、よその自治体でもよいから、発達障害児に対して親がシャドー（付添い）に付いている事例があることを示せるとよいだろう。

3. シャドーの仕方

<基本>

「シャドー」と言っても、そんなに難しく考えなくてよい。ABAの基本はいつも「プロンプト&強化」。子どもの行動をそばで観察していて、必要だな、と思ったときに必要な行動をプロンプトし、ただちに強化をすればいいだけのことである。お菓子は使えないのでほめ言葉やトークンを使おう。

<やってはいけないこと>

やってはいけないことは「指示の出し過ぎ」。子どもができないからと言って、せかせかせかしたり、叱ったりしていると、子どもはますます、あなたの声かけがなければやらない子になってしまう。指示は一回だけ。落ち着いた口調で明確な指示を出し、まだできないことなら直ちにプロンプトして成功させる。おだやかにほめて強化し、次から徐々にプロンプトをフェーディングしていく。

<過剰支援>

もう一つの「やってはいけないこと」は「過剰支援」。子どもができるはずのことまでつい世話を焼いてしまっている、シャドーの意味はない。時にはじっくり待ってみて、子どもが自分でできるかどうか、試してみることも必要。もしできたら、心からほめてあげよう。だめだな、とわかったら、落ち込まずに次からプロンプトを再開して、それを徐々に減らして行く。

<長期目標>

大切なのは、目標をしっかり持つこと。まず長期的に何をを目指すのかを、しっかり頭に入れておく。最終的に普通クラスで一人でやっていけるようにしたいのか、それは無理として、せめて将来、できるだけ人の援助なしでできることを増やしたいのか。

目先の授業に付いていけるようにすることだけを考えていると、いつの間にか、あなたがそばにいないければ何もできない「指示待ち人間」になってしまう。学校で学ぶことは学業だけではない。先生の指示を聞き取り、周りの子どもの動きを見て、次に何をすべきかを自分で判断できるようになることがとても大切。そのためにどのタイミングで指示やプロンプトを減らすべきかを常に意識しよう。

<短期目標>

次に短期的には何を当面の目標にするか（標的行動）を場面ごとにはっきりさせておく。漠然と「みんなについていけるように」とか「みんなと仲良く遊べるように」と考えているだけでは、何を援助していいか、見失ってしまう。

例えば朝の時間は、自分でかばんをロッカーにしまいに行くことを当面の目標にする。工作の時間は先生が説明する間、それを見て聞くことを目標にする、など。一度にあれもこれも、と欲張るのではなく、「いまはこれとこれ」と決めたら、それ以外の時間は子どもに好きにさせておき、その場面になったときだけすばやく指示やプロンプトをする。そうすればシャドーもぐっと楽になる。常にスモールステップを心がけ、一つの行動ができるようになったら新たな目標を定める。

<シャドーの定位置>

ABAに基づく支援は、プロンプトにしても強化にしても、「即時」が大切。子どもが必要とするときに即時にプロンプト&強化するためには、子どものすぐそばにいないといけない。だから子どものすぐそばを自分の定位置と考え、当面その位置をキープすること。授業中は椅子をもらって子どもの席の横にすわる。朝礼の時も子どものすぐそばにいること。

園や学校側は、シャドーをできるだけ早く子どもから引き離そうとするものだ。「お母さん、お子さんのそばにいますとお母さんがお母さんのことを気にしますから、うしろで見ていて下さい。」そう言われて素直に従うと、次は「廊下で見ていて下さい」。その次は「もう来なくていいですよ」と、一カ月で学校から追い出されてしまうだろう。だから学校側が何と言おうと、当面は子どものそばから離れないこと。いつ離れるかはあなた自身が決める。

1, 2カ月経って「この場面は、もう子どもだけでできる」と見極めたら、その場面ではシャドーは少し離れたところから見守るようにする。しかし必要ならいつでも定位置に戻れるようにしておこう。

<問題行動への対処>

子どもに問題行動があれば、それを防ぎ、減らすことがシャドーの大事な役目になる。例えばお友達をたたく行動がある場合は、できるだけ未然に防ぎ、たたいてしまったら無視して消去するか、タイムアウトをするなど、その場でABAの原則に従って必要な措置をとる。

ただし問題行動にばかり気を取られると、子どもは改善しない。むしろ適切な行動のレパトリーを増やすことに力を注ぐこと。できることが増えれば、自然に問題行動は減ってくる。

<休憩時間・自由時間>

休憩時間、自由時間に最初から他の子どもと遊べる子はほとんどいないはずだ。シャドーが積極的に動いて、お友達を誘ったり、子どもを促したりして、一緒に遊べるようにお膳立てをしよう。シャドー自身が遊びを提案してもよい。もしうまく遊べるようになったら、シャドーはいつの間にかそっと身を引いて行く。

4. 園・学校との連携

子どもを特別支援学校や支援学級に入れる場合、あるいは普通学級に入れても親やセラピストがシャドーにつかない場合には、園・学校とよく話し合い、こちらの希望を伝えて、できるだけそれに沿った対応をお願いすることになる。

ただ、現実にはこちらの希望通りにはならないことが多い。

<介助員とは話せない？>

まず親がシャドーにつかない代わりに、園・学校側が介助員をつけてくれたとしよう。親としては介助員と直接話をして連携を取りたいのだが、それが認められない学校が多い。

学校側の理屈では、クラスの子どもの教育に責任を持つのはあくまで担任である。だから親の相談に乗るのは担任であって、介助員ではない、ということのようだ。

<担任のレベル>

担任教師のレベルも、それほど高くはない。いい先生も時にはいるが、多くは「普通のおばさん」だと思った方がよい。ABAの本を読んで下さい、と一冊貸しても、いつまで経っても返って来なかったりする。読まないから返せないのだ。そんな場合には、ABAを勉強してもらうことはあきらめて、具体的な対応だけをお願いしよう。

<相談のタイミング>

まず入学前に何度か話し合いを持ち、こちらの要望を校長・教頭に伝えておく。

入学したら担任の先生に改めてこちらの希望を伝えることになるが、担任教師は、自分の担任する子どもたちを、まず先入観なしに見たいものだ。だからそんなにあせらずに、4月下旬に初めての面談があるので、その時に相談するとよい。

相談する際は、あまりABAのことは前面に出さず、子どもに接する上でお願いしたいことを、あくまで低姿勢にお願いするとよい。「教えてやる」という姿勢は嫌われる。

<学内会議>

わが家の場合、発達障害児の親がシャドーに付くのが市内で初めてということもあってか、年に1～2回、学内で親を交えての会議が開かれた。そこに校長、教頭、学年主任、娘の担任、特別支援教育コーディネーターの先生、特別支援学級担任の先生がずらりと顔をそろえて、主にシャドーを来季も継続するかどうか、を中心に、娘の現状と、今後の方針が話し合われた。ありがたいことと言いきらう。

<巡回相談>

幼稚園・小学校には、教育委員会が委託した発達障害児教育の専門家が学校を巡回して、特に問題を抱えている子どもの扱いについて担任教師の相談に乗る、という制度がある。この専門家がABAに好意的だと都合がよいのだが、しばしば正反対で、困った存在になる。親の働きかけで担任教師がABA的に子どもに接してくれていても、このえらい先生が巡回してきて、方針をひっくり返してしまうのだ。そういう場合はひたすら我慢して、その先生が学校の信頼を失うまで待つしかない。

<特別支援学級>

特別支援学級では、親と担任教師との関係が悪化することが多い。担任教師の力量が総じて低いことも問題だが、親も学校に期待しすぎるきらいがある。発達障害を持つ子どもを3人も抱えたら、能力のある教師といえども、一人にかかりきりになることはできないのだから、できることには限りがあるのだ。学校に入っても、必要なことは親が教える、という心構えが必要である。